

<中央図書館開館 25 周年>

開館 25 周年を祝う

野口 洋二（早稲田大学名誉教授・元図書館館長）

中央図書館が開館 25 周年を迎えるという。まことに慶賀すべきことであり、この間充実発展させることに努めてこられた館員の皆さんに心からの敬意を表したいと思う。

ところで、わたしが館長になったのは 1990 年の 9 月、その前も副館長を務めていたから、移転から翌年 4 月の開館にかけての大変な時期に責任者として居合わせたことになる。難題はまず移転であった。館員の中には、「とても無理です。間に合いません！」とヒステリックに叫ぶ館員もいて、実に困難な作業であった。しかも、開館直前には、学生が乱入していたる所に落書きをし、全員で夜を徹して消して回るといったハプニングも起こった。

開館してからも大変だったことは言うまでもない。開館を記念する行事が次々と続いたからである。まず 4 月に開館の式典、ついで 7 月には「私立大学図書館協会」の総会、9 月には学術情報システム関係の国際会議などが国際会議場で開かれ、10 月には池袋の西武で「早稲田と文学の一世紀」展が行われ、いずれも多くの方々の参加をえて盛大に行われた。移転や開館、さらにはこうした記念事業を無事行うことが出来たのも、当時の館員の皆さんが気持ちを

ひとつにし、一丸となって事に当たったからに他ならない。

その後館長を退任した後もわたしは、図書行政を担当する理事を八年間勤めたが、この間に図書館としての基本的な事業はほぼ完成したと自負している。すなわち、(一) 開架を中心とする「開かれた図書館」への発展、(二) 本館と理工・戸山・高田など各分館を結ぶ学内図書館網の整備、(三) 学術情報の検索システムの構築などである。こうした整備によって、利用者が激増したばかりでなく、図書館機能も大幅に拡充したのではなかろうか。もちろん、これらの事業の多くは、歴代の館長をはじめ館員諸兄姉の並々ならぬ努力の賜物でもあるが。

最近わたしは、本を書くために、しばしば図書館を利用させてもらった。わたしの専門は西欧中世史だが、欲しい資料はほとんど収蔵されている。無いものも館員が直ちに探してくれた。こうして、素晴らしい図書館であることを改めて実感することができた。

今後も蔵書が一層充実し、優秀な館員の下で図書館が更なる発展を遂げることを心から願っている。



1991 年新築当時の総合学術情報センター（中央図書館・井深大記念ホール・国際会議場）外観